

— 資 料 —

教養科目「日本の生活文化」受講生の生活文化に対する意識と現状(Ⅱ)
～平成25年度と平成26年度受講生の比較を通しての検討～

細見和子* 西川貴子**

Students' Awareness and Their Perceptions of Cultures Related to Their Life in
Liberal Arts Class, "Cultural Studies in Japanese Life" (Ⅱ)
An Observation between Students in 2013 and 2014 Taking Class

Kazuko HOSOMI Takako NISHIKAWA

要 旨

「日本の生活文化」は、教養科目として短期大学生に対して開講されているが、学生の理解度を把握することを目的として、平成25年度に引き続き平成26年度もアンケート調査を実施し、比較検討した。その結果、両年度とも「授業内容の理解度」は項目により差はあったが、全項目の平均点は3点以上(5点満点)で、概ね理解できていると思われた。また、26年度は12項目中9項目で25年度より理解度が上昇したこと、受講後の感想も25年度よりも「役に立った」とう回答が高かったこと等、理解度は改善されていた。それは受講生数が少なかったことも一因と考えられるが、授業を一部改善して行ったことも影響したと推察する。これからも毎年授業の内容や方法について見直していき、日本の生活文化を受け継ぐ担い手としての学生の意識改善に繋がる授業を展開していきたい。

キーワード：日本の生活文化・短期大学生・意識・伝承

1. はじめに

著者らは「日本の生活文化」という教養科目を担当し、若い世代にも日本の食文化をはじめとする生活文化や伝統文化を伝えたいという思いで授業を続けている。そこで、学生の日本の生活文化に対する意識や現状を把握し、授業内容についても自己点検を行いたいと考え、平成25年度受講生70人を対象にアンケート調査を実施し、授業の理解度や日本の伝統文化に対する意識の状況を考察した結果を報告¹⁾した。単位をとることが動機であった受講生も、受講後は役に立ったと回答し、役に立たなかったと回答した受講生は皆無であり、著者らの授業の重要性を改めて認識でき、母親予備軍である女子学生に日本の生活文化を伝承していく必要性を感じた。

そこで、今回は、平成26年度受講生に対して同様の調査を行い、学生の理解度を把握をする

*神戸女子短期大学総合生活学科, **神戸女子短期大学食物栄養学科

とともに、平成25年度と26年度の比較を通して、今後の授業のあり方や学生の日本の生活文化に対する意識の現状を考察したので報告する。

2. 日本の生活文化の授業目的および調査方法

(1) 「日本の生活文化」授業の目的

教養科目として、後期に開講されている「日本の生活文化」の授業の目的は、日常生活の中に伝承されている日本の独自の文化や習慣などの生活文化について学び、日常生活に役立てることである。それは古くからの慣わしである節句などの年中行事、人生の節目節目の冠婚葬祭などの行事、人との付き合いの上での常識やマナー、また、日本の食文化や着物の文化など日本独特の生活文化である。これらの生活文化は、長い歴史の中で生まれ発展したものであるが、今日、私たちの生活様式は洋風化・多様化され、また、核家族化が進み、その伝承が薄らぎ、簡略化されるようになりつつある。伝統的な日本の生活文化には、日本人の深い思いやりの心が宿り、これらの生活文化を知ることは、日本の心を知ることにつながると考える。日本の生活文化を学び、美しい季節の移り変わりの中にある「和の心」を見直し、日常生活に役立ててほしいという思いで授業を行っている。

(2) 調査方法および内容

平成25年度および26年度の「日本の生活文化」受講生に対して、授業終了の15回目にアンケート調査を実施した。調査内容は、①受講理由、②受講後の感想、③受講内容の理解度、④日本の生活文化を学んだ相手、⑤家庭で行なっている行事（行事食）⑥きものを着た経験、⑦将来着ものを着たいと思うか、の7項目についてである。

3. 結果

平成25年度受講生70名、26年度受講生22名についての結果を集計した。

(1) 受講理由について

受講理由については、①単位をとるため②日本の生活文化に興味があった③学びたいと思った④面白そうな科目だと思った⑤なんとなく⑥空き時間だったの6項目をあげ複数回答とした。「単位をとるため」のみと答えた学生とそれ以外の項目を複数回答していた学生（興味あり・学びたい）に分けて割合を示したのが図1である。平成25年度は30%が「単位をとるためのみ」と答え、70%は「興味あり・学びたい」と答えたのに対して、平成26年度では18%が「単位をとるためのみ」と答え、82%は「興味あり・学びたい」と答えた。受講生数が異なるが、平成26年度の方が「興味あり・学びたい」と答えた割合が高かった。

(2) 受講した感想について

受講した感想についての比較を図2に示した。この授業が役に立ったかどうかについて質問をしたが、平成25年度は「役に立った」(83%)、「どちらともいえない」(17%)であったのに

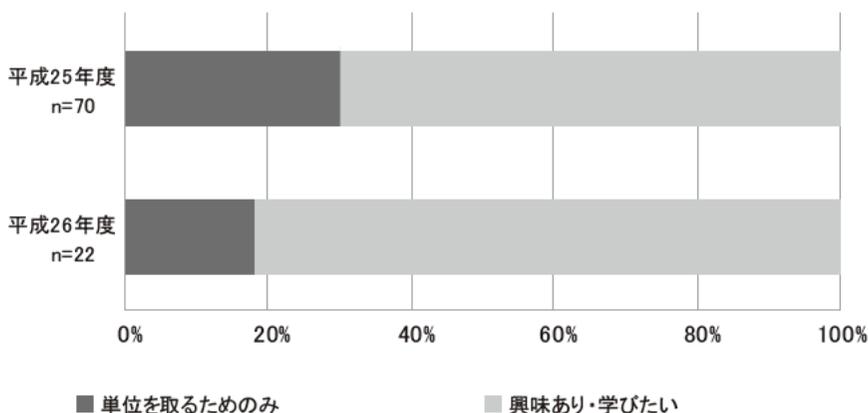


図1 受講理由

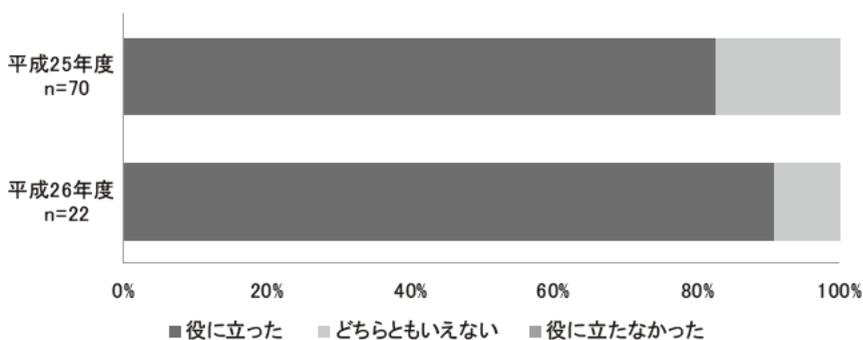


図2 受講した感想の比較

対し、平成26年度は「役に立った」(91%)、「どちらともいえない」(9%)で、「役に立った」と答えた割合は、平成25年度と比べて、26年度の方が高かった。「役に立たなかった」は両年度とも0であった。

(3) 授業内容12項目の理解度

授業の理解度を見るため、授業の内容を12項目に分けて、受講前を1点とした場合、2点：あまり理解できなかったと思う、3点：まあまあ理解できたと思う、4点：かなり理解できたと思う、5点：よく理解できたと思う、の5点満点で自己評価をさせた。12項目は次のとおりである。

- ①日本の年中行事について理解できた。
- ②人生のお祝い事について理解できた。
- ③結婚式の招待状の返事の書き方、スピーチで使ってはいけない言葉、お祝い袋の書き方など慶事のマナーについて理解できた。
- ④数珠の持ち方、焼香の仕方、宗教によって異なるお供え袋の書き方など、弔事のマナーについて理解できた。

- ⑤敬語の使い方の基本について理解できた。
- ⑥手紙の書き方の基本、お辞儀の仕方の基本、物の渡し方の基本について理解できた。
- ⑦きものの部分の名称や素材、文様について理解できた。
- ⑧日本料理の特徴が理解できた。
- ⑨お箸の使い方やタブーが理解できた。
- ⑩食生活のマナーについて理解できた。
- ⑪和菓子の歴史（いわれ）について理解できた。
- ⑫日本には独特の生活文化があることが理解できた。

授業内容12項目の理解度について、受講生全体の平均点と受講理由別の平均点を表1に示した。12項目全ての平均点は平成25年度3.3点、26年度3.5点と両年度とも3点以上で、「まあまあ理解できた、かなり理解できた」が大半を占める結果であった。項目により平均点に差が

表1 授業内容12項目の理解度（平均点）の比較

授業内容 12項目	全平均		単位を取るためのみの者		興味あり・学びたい者	
	平成25年度 (n=70)	平成26年度 (n=22)	平成25年度 (n=21)	平成26年度 (n=4)	平成25年度 (n=49)	平成26年度 (n=18)
①日本の年中行事について理解できた	3.3	3.5	3.3	3.0	3.3	3.6
②人生のお祝い事について理解できた	3.3	3.5	3.1	3.5	3.3	3.4
③結婚式の招待状の返事の手書き方、スピーチで使ってはいけない言葉、お祝い袋の手書き方など慶事のマナーについて理解できた	3.2	3.4	3.1	3.3	3.2	3.4
④数珠の持ち方、焼香の仕方、宗教によって異なるお供え袋の手書き方など、弔事のマナーについて理解できた	3.1	3.3	3.0	3.3	3.2	3.3
⑤敬語の使い方の基本について理解できた	3.4	3.6	3.4	3.3	3.4	3.7
⑥手紙の書き方の基本、お辞儀の仕方の基本、物の渡し方の基本について理解できた	3.3	3.2	3.2	3.0	3.3	3.3
⑦きものの部分の名称や素材、文様について理解できた	3.1	3.3	3.0	3.0	3.1	3.3
⑧日本料理の特徴が理解できた	3.4	3.5	3.3	3.0	3.4	3.6
⑨お箸の使い方やタブーが理解できた	3.6	3.6	3.5	3.5	3.7	3.7
⑩食生活のマナーについて理解できた	3.5	3.5	3.3	3.0	3.6	3.6
⑪和菓子の歴史（いわれ）について理解できた	3.3	3.4	3.3	2.8	3.2	3.6
⑫日本には独自の生活文化があることが理解できた	3.6	3.9	3.3	3.5	3.7	4.0
12項目の平均	3.3	3.5	3.2	3.2	3.4	3.5

あったが、最も高いのは平成26年度の「日本には独特の生活文化があることが理解できた」3.9点であった。次に高かったのは、平成25年度の「日本には独特の生活文化があることが理解できた」と「お箸の使い方やタブーが理解できた」2項目、平成26年度の「敬語の使い方の基本について理解できた」「日本料理の特徴が理解できた」「お箸の使い方やタブーが理解できた」3項目で3.6点であった。平均点が最も低かったのは、両年度とも「弔事のマナーについて理解できた」「きものの部分の名称や素材、文様について理解できた」の2項目であったが、平均点は、平成25年度3.1点から26年度3.3点と上昇していた。

また、受講理由別では、両年度とも、「興味あり・学びたい」と回答した者の方が、「単位を取るためのみ」と答えた者より、ほとんどの項目で理解度の平均点は高い傾向にあった。

(4) 日本の生活文化を学んだ時期および相手

日本の生活文化を学んだ時期について、複数回答で得られた結果を図3に示した。平成25年度は短大でこの授業を受けてから(46%)と答えた者が最も多かったが、平成26年度は小学校(39%)が最も多かった。

また、家族の中で日本の生活文化を学ぶ相手については、母が最も多く、次が祖母、父の順で、両年度とも傾向は同じであった。

(5) 家庭で行っている行事や行事食について

学生が家庭で行っていると思われる行事や行事食について、複数回答の結果、実施率50%以上のものを多い順に表2、3に示した。平成25年度は10行事、26年度は9行事が、実施率50%以上であり、ベスト3は、お正月、クリスマス、バレンタインデーで両年度とも順位は異なるが同じ行事で、80~90%の実施率あった。4位以下も初詣、母の日、父の日、ホワイトデー、ひな祭り、お彼岸の墓参りで、同じであった。平成26年度は敬老の日が9位に入っていた。

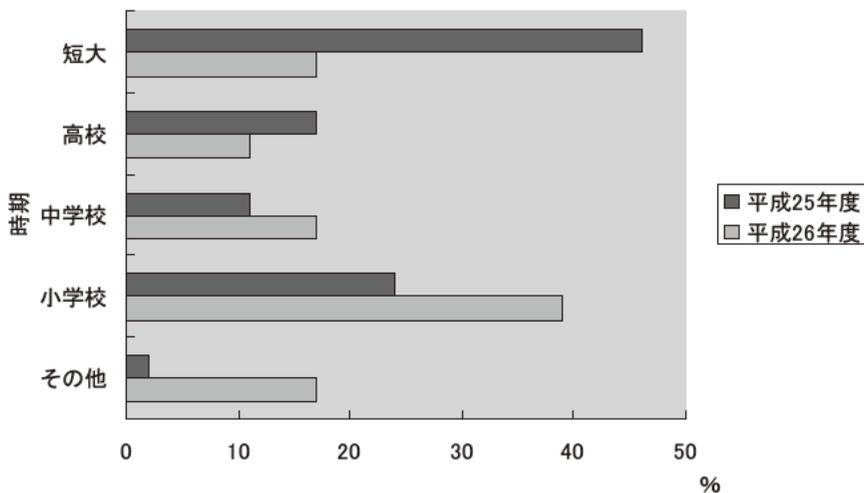


図3 学んだ時期

表2 家庭で行う行事（実施率50%以上）

順位	平成25年度		平成26年度	
	行事	%	行事	%
1	バレンタイン	91	お正月	91
2	クリスマス	91	クリスマス	91
3	お正月	80	バレンタインデー	91
4	初詣	73	母の日	73
5	母の日	69	お彼岸の墓参り	68
6	父の日	67	ホワイトデー	68
7	ホワイトデー	56	父の日	64
8	ひな祭り	53	初詣	64
9	お彼岸の墓参り	51	敬老の日	59
10			ひな祭り	55

表3 家庭で食べている行事食（実施率50%以上）

順位	平成25年度		平成26年度	
	行事食	%	行事食	%
1	年越しそば	94	お雑煮	91
2	お雑煮	89	年越しそば	91
3	節分（まき寿司）	74	節分（まき寿司）	86
4	おせち（黒豆）	67	おせち（黒豆）	68
5	節分（豆まき）	56	ひなあられ	64
6	おせち（かずのこ）	54	おせち（かずのこ）	59
7			おせち（ごまめ）	55
8			おせち（煮しめ）	55
9			節分（豆まき）	55

また、家庭で食べている行事食も両年度ともほとんど同じ傾向であったが、実施率50%以上は、平成25年度6種類に対して、26年度は9種類であったが、お雑煮、年越しそば、節分のまき寿司、おせち料理の黒豆がベスト4で、両年度とも同じであった。5位以下で共通であったのが、節分の豆まきとおせちのかずのこであった。

（6）きものを着た経験について

受講生が今までにきものを着た経験については、子供のころの七五三（平成25年度91%、26年度95%）が最も多く、次が夏のゆかた（平成25年度79%、26年度82%）の2回程度で、お正月の初詣やお稽古ごとなどはほとんどなく、両年度とも同様であった。

(7) 将来きものを着ようと思うかについて

将来きものを着ようと思うかどうかについては、着たいと答えた者は、平成25年度84%、26年度95%で、その理由については、「日本人だから」、「きものを着たいから」、「伝統を大切にしたいから」であり、両年度とも同様であった。

3. 考察

「日本の生活文化」の授業について、学生の理解度を把握する目的で、受講生にアンケート調査を行ったが、その結果、授業内容12項目すべてにおいて理解度の平均点は、平成25年度(3.3点)より26年度(3.5点)の方が上昇していた。

受講理由別については、両年度とも「興味あり・学びたい」者の方が、「単位を取るためのみ」と答えた者よりほとんどの項目で理解度の平均点が高い傾向にあった。また、「興味あり・学びたい」者の平成26年度の平均点は3.5点、25年度は3.4点で、「興味あり・学びたい」者の平均点も26年度の方が高かった。さらに、受講した感想について「役に立った」と答えた割合も26年度の方が高いという結果であった。

これらのことから、学生の科目選択時の意識が、理解度に影響している可能性が示唆された。また、平成25年度(70名)に比べ26年度(22名)は受講生が少なかったことも理解度に影響していると考えられる。

一方、平成25年度においては、理解度が低かった「弔事のマナー」「きもの」の2項目は、いずれも平成26年度では、理解度は上がっていた。これについては、昨年度の調査結果から授業内容の改善に取り組み、工夫を加えた効果も一部みられたのではないかと推察され、毎年の授業の見直しの必要性が示唆された。しかし、今回も前回もその項目を欠席していたかどうかについての確認はしていなかったため、今後、欠席者についての考慮が必要である。

家庭で行なっている行事の上位にお正月があり、家庭で食べている行事食にお雑煮や黒豆、年越しそばが上位を占めていることは、年末年始の行事、すなわち、1年の始まりを大事にする日本人の心は継承されていることが推察される。また、学生の50%以上が実施していると答えた行事に、母の日と父の日があり、平成26年度には敬老の日が入っている。このことは、学生たちは、両親や祖父母に対する感謝の気持ちを大事にしていると推察される。

お箸の授業の理解度が高いのは、日本食を供する時のお箸の正しい持ち方の練習や正しい食のマナーに少しの実技を加え、本物にふれながら授業を展開した結果、学習意欲を喚起することに繋がったと考えられる。

日本の伝統衣装である「きもの」については、着た経験は幼少時の七五三であり、次いで、簡単に着ることのできる夏の浴衣という回答が大半を占め、きものと日常生活の結びつきが少ないようであった。日常生活ではきものを着る機会は少なくなっているが、学生たちはきものに対して興味はあり、着たいという希望も持っている。このことから、日本の伝統や文化を大切にすることは潜在的ではあるがもっていることがわかった。

また、外国から見た日本文化の授業では、伝統的な日本の衣食住に関わる文化を紹介することによって、文化の違いを身近に感じられたのではないかと考えている。

以上のことから、受講動機が、単位をとることのみと消極的であった受講生も、学びたいという積極的な受講生も、どちらも受講後は役に立ったと回答し、役に立たなかったと回答した受講生は皆無であったことより、この授業は、学生にとって、将来役に立つ内容であることが確認できた。したがって、授業の概要や目的について丁寧な説明により、学生の受講時の動機付けをしっかりと行うとともに、ディスカッションなどを交えて学生に考えさせる授業の展開を試みるなど理解度の向上につながる工夫が必要ではないかと考えている。

4. おわりに

国際化が進み欧米文化を取り入れ、日本古来の生活様式は一変し、洋風化が進んでいる現状であるが、2005年に食育基本法²⁾が制定され、食育推進基本計画³⁾が立てられ、国の施策として小学校や保育園で食育が推進されるようになった。さらに、2006年の教育基本法の改正⁴⁾や2007年学校教育法の改正⁵⁾が行われ、伝統や文化に関する教育に力を注がれるようになってきている。これらのことより、短期大学の授業で日本の生活文化や伝統文化を開講することは、日本の文化に目を向け、触れ合い親しむ時間の提供の場としても大切であると考えられる。季節ごとの行事など、四季折々の変化を愛でる心の教育は大切であり、今後も「日本の心」を伝える努力を続けていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 細見和子・西川貴子, 教養科目「日本の生活文化」受講生の生活文化に対する意識と現状, 神戸女子短期大学『論攷』第60巻125-132 平成27年3月発行
- 2) 食育基本法(平成17年法律第63号)(平成21年改正法律第49号)
- 3) 第2次食育推進基本計画(平成23年食育推進会議決定)(平成25年一部改正)
- 4) 教育基本法(平成18年法律第120号)
- 5) 学校教育法(平成19年法律第96号)